



アルミ配管用継手「アルミおっぞんくん」。
アルミ管と銅管の接続も可能（上）

独創的配管用継手でプレゼンス発揮 大手と二人三脚で新市場を開拓

東尾メックは水道、空調、ガスなどの配管用継手メーカー。時代とともに変化するニーズに応えるため、革新的機構を持つ商品を次々と開発してきた。高性能かつ簡単な施工を可能にした商品は世界からも注目されている。さらなる飛躍を目指し改革を進行中だ。（編集部）



「れいわおっぞん」の構造。レンチで締め込むと銅管に継手の爪が食い込んで抜けなくなる。ゴムシール、メタルシールも施されている

管と管をつなぐ「継手」。東尾メック（大阪府河内長野市）は樹脂管、ステンレス管、冷媒空調銅管などさまざまな種類のパイプを連結する継手を製造販売する。「漏れない、抜けないを基本コンセプトに独自の特許継手を開発、同時に設備も自社設計、自社技術で作ることに成功してきた。かつての同業大手もこれらに対応できなかった」と代表取締役会長の東尾光紹氏は同社の強みを語る。

例えば、東尾メックのステンレス銅管用継手「KKベスト」は、レンチで締め込む必要がない樹脂のリングをカ

チッと装着するだけでロックできる製品。施工時間は従来工法の3分の1という。冷媒配管用の「れいわおっぞん」は、レンチで軽く締め込むだけで銅管に継手の爪が食い込んで抜けなくなる方式。同製品シリーズは、ロウ付けを不要にする継手として約20年の実績があるが、2021年に販売を開始したこの令和版では、部材点数を減らし価格を下げながらも、漏れない機能を向上させた。ダイキン工業との共同開発品としても注目されている。

高砂熱学工業とは17年に「アルミおっぞんくん」を共同開発している。

腐食しやすいアルミ配管と銅製継手の接触を防ぎ腐食を抑える仕組みを盛り込んだ。近年、銅の価格が上昇、「業界ではアルミの冷媒配管システムの普及促進に乗り出している。近い将来、大きな市場になり得る」と東尾会長は期待を込める。ちなみに日本で唯一アルミの冷媒配管用継手を作る東尾メックでは、同製品を一步先に市場ができつつあるトルコに輸出しており、そこから欧州市場にも広がっていく予定だ。

「令和の大改革」進行中

東尾メックはさらなる発展を目指し、

大阪府
河内長野市

東尾メック

会社概要 ●東尾メック株式会社:1950年創業。マレアップル継手、樹脂管用継手、冷媒配管用継手などの製造販売。従業員:161人。売上高:約72億円(23年3月期見込み)。本社:大阪府河内長野市菊水町8-22 TEL:0721-53-2281
https://www.mech.co.jp/

多員経営者へのメッセージ!!

中小企業の事業の根幹はやはりリノベーションです

時代の変化に対応してきた当社の原点はイノベーション。皆さんとともに、挑戦し続けることで世の中の役に立つ存在であり続けたいと思います。

今、「令和の大改革」に取り組んでいる。東尾会長はその理由を「継手業界は再編が進んでいる。激変する環境下で成長を続けるために、改革が必要と考えた」と語る。

戦略製品の樹脂管と冷媒配管用の継手については海外展開を加速させる。「アルミ管の継手もそうだが、樹脂管継手も国内販売を強化しつつ、欧州や豪州、アジアの市場に力を入れる。冷媒配管継手はダイキン工業と一緒に海外プロジェクトを進める」と東尾会長は意気込む。さらに国内では利用が大幅に減少したマレアップル（可鍛鋳鉄）継手については中国とタイでのOEM生産に切り替える。

同社は製品だけではなく、製造設備も自社開発しているが、令和の大改革では、データを活用したスマートファクトリー化をより進め、自動倉庫を拡大して業務の効率化も図る。

東尾メックの創業は1950年。大阪府南東部の河内長野市は古くから鋳物産業が盛んで、鋳物職人だった会長の父、清一氏が独立して会社を立ち上げた。当時製造していたのは、前述のマレアップル継手。高度成長期の住宅需要増に伴って同社も発展した。

ところが、鋼管内面のさびによる「赤水」が社会問題になり、管の内側を樹脂で塗装した複合継手が求められるようになった。「直角に曲がった継手の内側を均一に塗装するのは難しい。しかし、塗装ノズルの先端に風車を付

けて塗布する技術を開発し、この課題を乗り切った」と話す東尾会長は当時30歳。東尾会長は、この複合継手を積水化学工業に直接売り込んで売り上げを伸ばした。

同社にとってもう1つの転機となったのが、95年の阪神淡路大震災だった。鋼管の脆弱さが露呈し、給水管などが樹脂管へと置き換わっていった。ここで、バネ鋼にジャンプピンを装着した継手を開発、パイプを差し込むとパチッと音がして施工完了を確認できる樹脂管用継手ができた。これが大

ヒット商品になった。

16年に会長の長男、東尾清吾氏が社長に就任。営業力を強化し、ブランド力を高めていきたいとしている。そして東尾会長は、「当社は常に独自の継手を開発してきた。振り返れば、そこにはずっとSDGsに合致した行動があったとも言える。これからも社会課題を解決するために変革を続ける企業でありたい」と言う。



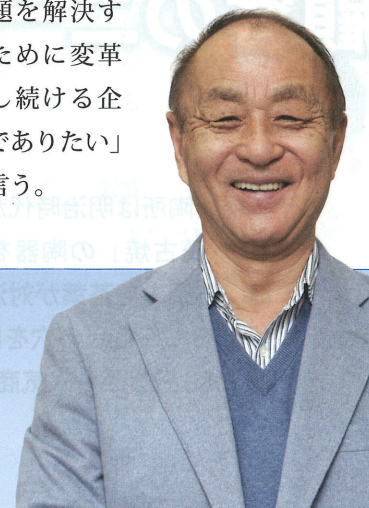
小ロット多品種生産を可能とした多工程集約型ロータリー組立機を自社開発。生産性は従来比2倍という

トップの思い

東尾メック 代表取締役会長

東尾 光紹 氏

ひがしお・みつあき 1942年大阪府生まれ。慶應義塾大学法学部卒、日立金属入社。68年、東尾継手（現東尾メック）入社。80年、代表取締役社長。2012年から現職



人本経営こそ 会社の成長を促す

製造業は働く人のスキルがあつてこそ、良い商品が作れます。そのために当社は社員重視の「人本経営」に徹しています。例えば製造現場では、多くの女性パート勤務人材を含め、スキルマップを導入し、1人1人のスキルレベルを明確にしています。スキルアップすれば、パートでも、自身の成長を実感できますしボーナスも出ます。年収450万円を稼ぐ人もいます。このほか報酬面で言えば、社員の退職時に、持ち株を高く買い取ったり、消化できなかった有休を買い取ったりといった制度も設けています。

従業員とのコミュニケーション活性化には、パート人材にも改善発表をしてもらっていますし、また食事会や旅行などの社内行事も活発に実施しています。夏は盆踊り大会で地域の方々も一緒に楽しんでもらっています。当社は働く人の会社です。当社は「一人はみんなのために、みんなは一人のために」の協働理念が根づいているのが大きな強みになっています。（談）

（写真：行友重治）